

# 明治期沿岸要塞における砲台設置場所の選定に関する研究

熊本大学大学院 学生会員 ○萩原 健志 熊本大学工学部 正会員 星野 裕司  
 熊本大学大学院 学生会員 永野 謙一 熊本大学工学部 正会員 小林 一郎

## 1. はじめに

筆者らは文献<sup>1)</sup>を通して、明治時代の沿岸要塞から得られる眺望景観に対して研究を行ってきた。

既存研究では、砲台場所から得られる眺望景観と事象との関係から、景観を「周流型」「斜行型」「疾走型」「擦過型」という4パターンに分類した。しかし、砲台がなぜその場所に設置されたのかという、根本的な事項に関しては触れていなかった。

今回の研究においては、当時の要塞設計思想、戦術などを明らかにすることによって、建設者の側面から景観的な特徴を明確にする。具体的には、当時の人々が砲台場所をどのように選定したのかを調べることで、事象を含む景観を創出する視点場の選定方法を明らかにする。

本研究では、研究対象となる沿岸要塞について、主に昭和18年に陸軍築城部本部によって編集された『現代本邦築城史<sup>2)</sup>』を用いて文献調査を行った。また、砲台位置の詳細確認などのために、浄法寺朝美著『日本築城史 近代の沿岸築城と要塞<sup>3)</sup>』、原剛著『国土防衛史その3<sup>4)</sup>』、海上保安庁発行の海図、柏書房発行の『正式二万分一地形図集成 九州<sup>5)</sup>』等を用いた。

## 2. 資料の構成に関する考察

陸軍築城部本部編『現代本邦築城史』は二部に分けられている。第1部は全4巻から成り、主に築城全般に関する項目、または明治初期から当時までの

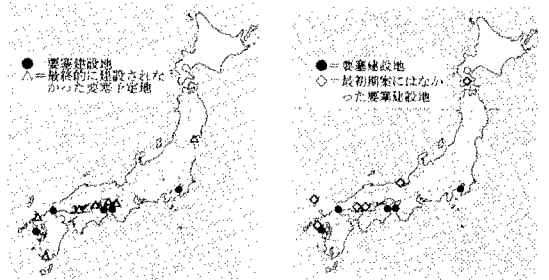


図-1 要塞最初期案

図-2 要塞建設地

資料がまとめられている。本研究では主にこのなかの第1巻「築城沿革」に対して調査を行った。第2部は全22巻から成り、要塞ごとの築城の歴史や、明治初期から当時に至る資料がまとめられている。

現代本邦築城史第1部の資料を、表-1のように5つの項目に分類した。

- (1)「防備の提案」：主に防禦の必要性を進言するもので、防禦地等について特に触れていないもの。
- (2)「地形図調査での計画」：現地調査を行う前の、防禦地、砲台場所等に関する計画案。
- (3)「現地調査後の計画」：現地調査を行った後の、防禦地、砲台場所等に関する計画案。
- (4)「防禦要領」：要塞建設地が決定した後の、各防禦地の砲台場所等に関する計画案。
- (5)「経費に関する資料」：要塞、砲台建築等の費用に関する資料。

表-1 第1部資料の分類表

区分	対応資料
防備の提案 (明治6~19年)	1・兵部大輔外2名の内地の防備、沿海の防禦及軍備に関する建議 6・陸軍卿山縣有朋の海軍編制定案急務に関する建議 7・陸軍卿の砲臺建造に関する建議 13・海軍卿東郷平藏の海軍防禦構想手続欠意見 16・参謀本部長の砲臺建築必要の建議 19・海軍局長の臨時海防に関する上申 36・参謀本部長の海軍防禦意見
地形図調査での計画 (明治6~13年)	3・教頭長「マルクリー」の本邦海軍防禦案 4・陸軍卿海軍局長の東京海軍防禦 5・陸軍少佐牧野源一親田久の東京海軍防禦 14・教頭長「ミュニー」の案 濱田 松江の防禦案
現地調査後の計画 (明治8~19年)	8・陸軍大尉原田一選外2名の全国防禦着手順序意見 9・教頭長「ミュニー」の本邦海軍防禦案 12・教頭長「ミュニー」の本邦北部海軍防禦案 15・海軍卿東郷平藏委員親田中佐等の案 濱田 松江の海軍防禦案 20・海軍局長の広島島、紀伊海峡、鳴門海峡及吉予海峡防禦案 21・海軍局長の豊後、呼子、長崎、対馬の防禦要領 23・横濱海軍防禦案 24・下関海軍防禦案 25・長崎海軍防禦案 29・下関防禦案 30・紀伊海峡防禦要領 31・防府海軍防禦要領 32・伊勢湾海軍防禦案 33・大阪湾海軍防禦案 34・神戸、兵庫、阿波海軍防禦案 35・教頭長「ワンスケラムベック」の日本国海軍防禦案 37・紀伊海峡5箇所の防禦要領
防禦要領 (明治16~23年)	22・教頭長「ワンスケラムベック」の東京海軍防禦案 26・東京海軍防禦案 27・東京海軍第二期防禦案 28・東京海軍第二期防禦案改正の議 38・下関・横濱海軍防禦要領(候補) 39・紀伊海峡防禦案(候補) 40・全国海軍防禦要領の概要
経費に関する資料 (明治9~14年)	10・陸軍卿の海軍編制案及砲臺建築着手順序並経費手続に関する建議 11・陸軍卿の前号金部卿陸防がにつき上申 17・参謀本部長、陸軍卿連署東京海軍砲臺の建設費が陸防がにつき上申 18・陸軍卿東京海軍砲臺建築費の議上申

### 3. 要塞位置の選定

要塞位置の変遷は、当時の地勢の捉えかたの変遷に深く関係していると考えられる。

①国土観の変遷 計画時の要塞場所の変遷は第1部から、以下のように捉えられる。表・1の資料3に「地勢ニ據テ案スル日本ノ国防武備ヲ施スベキ部分ハ南海岸ヲ主要トナス」とあるように、当初その予定地の多くは南側の海岸であった(図・1)。主要な地点として、首都である東京の他に、大阪・神戸を含む内海部分、長崎などがよくあげられていた。当初は鹿児島の名がよく見られたが、明治9年以降は見られなくなり、逆に北側の海岸に位置する港の、舞鶴や敦賀などが見られるようになった。

②要塞化に適した地形 当初名前があがっており、その後明治時代内に要塞化(または防備地に選定)に至らなかった場所を見ると、明石海峡、防予海峡、豊後海峡、大阪港、神戸港、などがある。

明石海峡、大阪港、神戸港等は、内海への入り口である紀淡海峡、鳴門海峡、広島湾、芸予海峡を押さえることによって必要がなくなったと考えられる。防予海峡は、当時の火砲の射程は10kmにも満たなかったため、広島港や呉港を同時に防禦することができなかったことなどが考えられる。豊後海峡は、付近に重要な港がないことや、その目的が下関や広島湾、芸予の要塞とほぼ同じであること、また海峡の幅が比較的広く、当時の砲台では十分な防禦がで

きなかったことなどが考えられる。

最終的に明治時代に要塞が建設された場所は図・2のようになる。

### 4. 下関における砲台位置の選定

地形の捉え方を詳細に見るために、下関を対象とする。明治時代の計画段階における砲台位置の変遷は、第2部の資料より、以下のように捉えることができる(図・3)。

下関において重要な地点は、まず火の山のある海峡の東北部分(早瀬瀬戸)であり、ついで西南部分(大瀬戸)、彦島北部(小瀬戸)であり、主に南側からの敵の侵入が想定されていた。

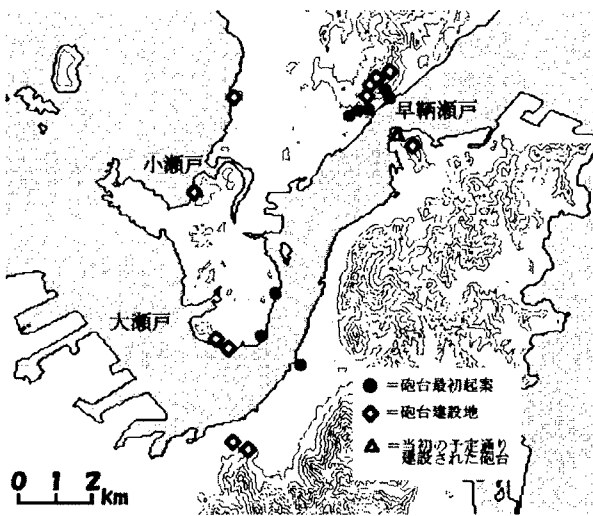
当初は最高でも茶臼山や皿山の標高80m付近など、比較的低い場所が多く選定されていた。当時は28cm榴弾砲がまだ採用されておらず、カノン砲を多く使って要塞を構築しようとしていたからだと思われる。火の山(標高約260m)の名前が、28cm榴弾砲が採用された明治20年4月<sup>6)</sup>の後、同年5月の「下関海峡防禦法改正案の要領」から現れていることから言う事ができる。

### 5. おわりに

今回の研究では、当時の文献に対する調査から、明治時代の要塞・砲台場所がどのように選定されたのかを考察した。今後は、当時の設計思想にまで踏み込んだ研究を行った後、砲台からの眺望に対して行った既存の研究と併せ、現在の景観についてリンクさせる必要がある。それにより、事象を複眼的に把握するモデルの一端を構築すると共に、実際に良好な眺望等を創出するにあたっての留意点をあげられるなど、現在の景観設計に対して有用なものになると考えられる。

#### 【参考文献】

- 1) 星野裕司他：九州の明治期に建設された砲台から得られる眺望景観に関する研究、土木系計画学研究・論文集 vol.18 no.2 pp.339-348 2001
- 2) 陸軍築城部本部編：現代本邦築城史
- 3) 浄法寺朝見：日本築城史～近代の沿岸築城と要塞、原書房、1971
- 4) 原剛：国土防衛史その3、1999
- 5) 地図資料編集会編：正式二万分一地形図集成九州、柏書房、2001
- 6) 竹内昭、佐山二郎：日本の大砲、出版協同社、1986



図・3 下関要塞の砲台位置の変遷